



林豹吉郎 篇1

天誅組の誕生

てんちゅうぐみ

天誅組をご存じですか。江戸時代の末期に結成された尊皇攘夷派そんのうじやういのグループです。このグループに宇陀出身の林豹吉郎はやしひょうきちろう（砲術家）が加わっていました。

江戸時代の末、江戸幕府は鎖国から開国へと政策を変え、諸外国の勢力が日本へ入ってくることとなりました。当時、これを脅威と考える人々が少なくありませんでした。また、幕府の権力は、弱くなりつつあり、幕府に対して批判的な人々もいました。

このような幕末の状況で、尊皇攘夷派（外国勢力を排除・幕府を倒して天皇中心の政治を行おうとするグループ）と公武合体派こうぶがったい（朝廷と幕府とが協力して政治を行おうとするグループ）とが対立していました。

文久3年8月13日、孝明天皇が、攘夷を祈願するために大和（奈良県）へ行幸することが決まりました。翌14日には、尊王攘夷派約50名が京都東山の方広寺に集まり、「天皇行幸の先鋒せんぽう」となろうとグループをつくりました。明治維新の魁さきがけとなる「天誅組」の誕生です。

彼らは、京都伏見から淀川を下り、大坂（大阪）から海路で堺へ上陸、そして河内（富田林・河内長野）へと向かいました。河内で同志を加えた天誅組は、総勢約80名となりました。

8月17日、河内から大和の五條へ着いた天誅組は、最初の武装蜂起を実行します。幕府の施設である五條代官所を襲撃し、代官らを殺害したのです。

この後、代官所近くの寺を本陣として、「五條御政府」と称する新たな政治機関を設置し、五條を天皇の直轄地とする宣言を行いました。

